

ガブリエル・フォーレ《チェロソナタ第2番》の分析

小林純生*

* 芸術学部, 日本大学

要旨 本論ではガブリエル・フォーレの書法を踏まえながら、チェロソナタ第二番を分析する。

キーワード：フォーレ, 楽曲分析, チェロ, ソナタ

1. はじめに

国民音楽協会 (Société nationale de musique) のコンサートにて、ピアニストであるアルフレッド・コルトーとチェリストでチェロソナタ第1番を初演したジェラルド・エッキングによってこの作品、《チェロソナタ第2番》は1922年に初演されている¹。国民音楽協会の設立にも関わっているガブリエル・フォーレ (1845年-1924年) によってこの曲は作曲されているが、様々な問題もこの団体にはあったとされている。フォーレ自身の回顧には「1870年以前はソナタ作品や弦楽四重奏曲を発表できるような機会は存在しなかった。そしてそういった作品を耳にする機会もなかった。そんななかでシャルル・

カミーユ・サン＝サーンス (1835-1921) がこの協会を1871年に立ち上げようとしており、更には若手作曲家の作品を演奏することを目標としていたことに鼓舞された。」とある²。この当時フォーレの年齢は二十代であり、当時の彼がこういった団体を求めていたことは想像に容易いが、後にこの国民音楽協会に対抗するべく設立された組織である独立音楽協会 (Société musicale indépendante) をモーリス・ラヴェル (1875-1937) らと共に1910年に立ち上げている³。国民音楽協会のなかには権威主義的なものが芽生えており、一部の限られた作曲家のみが恩恵を受けられる排他的な場所になっていったともされている。そういつ

¹ Nectoux, Jean-Michel. *Gabriel Fauré: a musical life*. Cambridge University Press, 2004.

² 同上

³ Duchesneau, Michel. "Maurice Ravel et la Société Musicale Indépendante." *Projet mirifique de concerts scandaleux*. *Revue de musicologie* 1994: 251-281.

た複雑な状況での演奏背景がこの曲の初演にはあり、尚且つこの作品の二楽章は、1921年に当時のフランス政府によって委嘱された、ナポレオン一世の死後100年の節目の為に作曲された作品に基づいている⁴。

サン＝サーンスの時代からアンリ・デュティユー（1916-2013）の時代にいたるまで、フランス人作曲家のチェロへの思い入れの強さは顕著であり、そういった理由としては「人の声との相似性」「精神性の合致」などが挙げられることもある。更にはポール・バズレール（1886-1958）といったフランスでのチェロ教育の優れた教員の台頭なども、チェロを作曲家にとってより魅力的な楽器へと押し上げていった⁵。

フォーレは、Landormy (1931)が指摘しているように、この時期には聴覚の不調を訴えており、その影響もこの作品にはある可能性がある⁶。この作品は強弱記号等の記述が少ないことや、いくつかの素材、もしくは楽想がフォーレが既に作曲していた楽曲と類似していることもこういった健康上の問題によるものとも考えられる。

この作品の分析に関しては Labussiere (1991)が特に参考となり、

本論においてもこの論文を検討しつつ分析を行う。

2. ガブリエル・フォーレの作曲書法

フォーレの作曲法は初期の段階から確立されているとも言えるが、ここにその特徴を簡易にまとめる。これらの書法の多くはクロード・ドビュッシー（1862-1918）やラヴェルに受け継がれており、彼らの作品を分析する際にも有益だろう。下記の特徴の多くにおいては和声的に記載しているが、結果として、そして意図的に、旋律にも特異性を与える効果があることを認識する必要がある。また、オルガニストとしての経験に由来する古典的、多声的な音楽への深さがフォーレの語法に含まれる点も考慮すべきだろう。フォーレの作曲書法に関しては Girard (2017)も参考となる⁷。

⁴ Nectoux, Jean-Michel. *Gabriel Fauré: a musical life*. Cambridge University Press, 2004.

⁵ Labussiere, Annie "Gabriel Faure 2e Sonate pour violoncelle et piano op. 117". *Analyse Musicale* 1991.

⁶ Landormy, Paul. "GABRIEL FAURÉ (1845–1924)." *The Musical Quarterly* 17.3 (1931)

⁷ Gerard, Anthony. *Le langage musical de Fauré dans le quintette n. 2 OP. 115*. Éditions Billaudot, 2017.

フォーレの書法の特徴

1. 調性的であるが、しかし旋法的でもあり（教会旋法）、その結果として III 度や VII 度の和音が使用される。独自の語法であり旋調性ともいえる。
2. 協和音程を主としつつも非和声音を多用することで旋律や響きに深みを与える。
3. 4 和音を 7 度音程が出来る形で多用し、しばしば連続させる。
4. 二つの和音間を揺れるような動き、もしくは同一和音の状態変化形と非状態変化形の間を行き来する動きを用いる。
5. 変終止をはじめとする完全終止ではない終止の頻繁な使用。特に変終止の使用が特徴的であり、これにより導音から主音への動き、調を確定させる動きを避けることで、調性をぼやけさせる。
6. 終止形に関連する、非転回形を中心とする劇的なバスの動き。
7. バスをあえて欠如させて和声の輪郭を虚ろにしつつ旋律的な場面を作る。
8. 経過音や掛留音の多用から引き起こされる和音の遅延や印象変化。
9. 頻繁な転調に加えての頻繁な転旋法。
10. 旋法的な書法から生じる限定進行音の逆進行（導音的な音が後続和音に移行する際に 2 度下降する、ドリアの和音における限定進行音の同様の取り扱いなど）。
11. 長調における III 度の和音の使用による色彩の変化。
12. 調性と旋法性の曖昧な行き来。つまりは旋法的な動きから、調的な終止への移行など。
13. 対斜の許容。
14. 全音音階の使用（ただし、ある 1 声部の動きのみが全音音階となっている程度）。
15. 多義的に解釈できる調性（ある調とも判定できると同時に、ほかの調とも解釈できる）とそこから生じる暗示性。
16. 半音階的進行とそれによって生じる和声的構造の遅延や曖昧さ。
17. 移り変わる和声感によって終止感を出さない進行が続くが、句読点となりうる箇所では効果的に、明瞭に終止を行う（特に長三和音で締めくくる）。
18. 第 3 音（導音）を排除した属 7 の和音の使用（調性感を曖昧にするために使用される）。排除せずとも、掛留などにより導音の出現を遅らせる場合も同様に確認できる。
19. 半終止的に聞こえる響きを作ることもあるが、半終止はしばしばフォーレにおいては避けられる。
20. 反復進行の特徴的な使用。
21. 長調における III の和音の第一展開形を V 的に使用する。
22. 短調において VI の和音を第一展開形で用いて I 的な印象を作る。
23. 半音階進行によって作られる特殊な、遠隔調和音的な偶成和音。
24. 遠隔調からの借用和音、もしくは

内部転調的に数小節遠隔調に行きつつ元の調への帰結。偶成和音なども経由しつつ対位的に元の調へ戻ることが少なくない。

25. 特徴的な保続音の使い方。ただ単純に主音や属音を保続音とするだけではなく、同じ高さで伸ばすだけではなく、1オクターブ移動することも。特殊な保留とも考えられ、ソプラノで行われることも。
26. 変位音を含む和音の使用。例えば属7の第5音の上方変位、長調属9の第3音欠如第5音下方変位、短調属9第5音下方変位など。
27. フォーレ的なカデンツ進行。短調のVII→I（長三和音でピカルディ的になることも）、短調VIの根音を上方変位→I、短調ドリアの和音IV7→Vなど。
28. 旋律において増4度や増5度を感じさせる進行をあえて用いるなど、古典的な対位法の規則に違反するような動きも少なくない。
29. リズムに関しては明快ではあるが、ヘミオラ的なリズムを挿入的に用いる側面が見受けられる。

3. チェロソナタ第2番分析

この楽曲の分析においては、先行研究の Labussiere (1991)を踏襲し、表記も同一のものをを用いつつ、フォーレ的な書法を確認する。

3.1 第1楽章

フォーレの後期的な特徴を確認できる作品であり、他の室内楽曲等と比較して強弱記号が少ないことや速度に関する表記、つまりアゴーギグの表記の少なさが後期的である。二つの楽想から構成されそれぞれをA、Bとする。また、Aはa1とその後楽節であるa2に分類し、a1はXとYに分割される（譜例1参照）。

譜例 1a: 第1楽章の楽想

譜例 1a: 第1楽章の楽想

The notation consists of four staves. The first staff is labeled 'a1x' and is in treble clef. The second staff is labeled 'a1y' and is in treble clef. The third staff is labeled 'a2' and is in bass clef. The fourth staff is labeled 's' and is in bass clef. The music is in 3/4 time and features a mix of eighth and quarter notes with some rests.

譜例 1b: 第1楽章の楽想

譜例 1b: 第1楽章の楽想

The notation consists of two staves. The first staff is labeled 'b1' and is in treble clef. The second staff is labeled 'b2' and is in treble clef. The music is in 3/4 time and features a mix of eighth and quarter notes with some rests.

Xにおいて特に目立つのはソレシドレという5音の固まりであり、5拍の動きが一つの動機的動きをすることで、3拍子の拍子感が著しく崩れ、ヘミオラ的リズムを用いるフォーレらしい書法だといえるだろう。Yに関してもリズムの点で特徴的な動きをしており、韻文詩の韻律法的に言えば、弱強格的な四分音符から二分音符に移行する動きが見てとれる。9小節目に現れる刺繍音的な動きもこの楽想を特徴づけており、様々な場面に登場する。Bに関しては旋律的な動きが強く、b2においてはYにおける弱強格との兼ね合いを感じさせる強弱格的な二分音符から四分音符へ移行する動きが用いられている。

a2の動き方はa1冒頭の6音を上下ひっくり返した動きとなっており、鏡に映されたような構造が出来上がる。更にa2のリズム構造も冒頭2小節目と左右対称になるようなリズムの構造になっている。

これまでに挙げられた全ての動機的な動き（a1X、a1Y、a2、s、b1、b2、）の登場する順番と担当する楽器を記載する。

表 1:楽想の出現箇所と担当楽器

a1X	1 小節目	ピアノ
a1X + a1Y	5 小節目	ピアノ
a1Y	11 小節目	ピアノ
a1Y	13 小節目	ピアノ
a1Y	16 小節目	ピアノ
a1X	17 小節目	チェロ
a1X + a1Y	21 小節目	チェロ
a1Y	27 小節目	チェロ
a1Y + a2	29 小節目	チェロ + ピアノ
a2	40 小節目	チェロ + ピアノ
a2 + s	45 小節目	チェロ
s	53 小節目	チェロ
s	63 小節目	ピアノ
a1X	65 小節目	チェロ
a1X + a1Y	67 小節目	チェロ
a1Y	71 小節目	チェロ
a1Y	76 小節目	チェロ
a1X	77 小節目	チェロ
a1X	83 小節目	ピアノ
b1	87 小節目	ピアノ
b1 + b2	91 小節目	ピアノ
b2	99 小節目	ピアノ
b1	103 小節目	チェロ
b1 + b2	107 小節目	チェロ
b2	115 小節目	ピアノ
b2	123 小節目	ピアノ
b2	127 小節目	ピアノ
b2	131 小節目	ピアノ

それぞれの動機の登場順序、登場回数、そして担当する楽器の登場順番や登場回数なども含め幾何学的な構造が浮き彫りになる。別素材への移り変わり方の特徴も特筆すべきだろう。つまりある素材を反復しその後、繰り返された素材に続いて新素材が現れ、その素材がまた繰り返され、そのパターンを繰り返す。ピアノに重要な役割をもたせているというのも、チェロソナタとしては珍しい書法だと考えられる。

フォーレ的な音運びに言及すると222小節にあるピアノのバスの動きは、同一音の保留ではなくオクターブの移動を混ぜるなど、伝統的ではない保続音の動きがみられる。73小節目から75小節目の音の動き方はヘミオラの点でフォーレらしさを感じられ、尚且つ4音以上の構成音の連続や特徴的な反復進行が確認できる。268小節からの多声的な動き方もオルガニストであったフォーレ的な書法であり、尚且つ彼の技法を特徴づける半音階進行となっている。

全体の構成について言及すると1小節目以降が提示部1、135小節目から展開部1、208小節目から提示部2、256小節目から展開部2、348小節目からコーダとなっている。展開部1はaとsが展開されている一方で、展開部2においてはさらにbもaとsに加えて展開される。

調の大きな流れとしては、ト短調から始まり、87小節目から変ホ長

調、168小節目からヘ短調、208小節目から再びト短調、276小節目からト長調となっている。これらに記載した調の箇所限定していえば、フォーレとしては比較的、古典的な和声法で書かれた転調となっており、導音が存在し、後続和音に進行する際に短二度上行している。

3.2 第2楽章

この楽章の主たる楽想となるa1は「葬送」を思わせる短三和音を感じさせるものとなっており、この楽章の背景を感じさせる動きとなっている。a1において特徴的なのはさらに完全5度と4度の動きであり、こういった形が展開される中でも素材の存在感を保ち続ける（譜例2参照）。15小節目から現れるa2は刺繍音的な音が第1楽章の楽想よりも強いものとなっており、この楽曲の中でも特に個性的な動機として用いられている。このa2は第一楽章の楽想a1yと類似のものである。Bは非常に狭い範囲を動くフレーズとなっており、ある意味では古い教会音楽のような雰囲気を出している。Labussiere (1991)が述べている通り、この第2楽章としばしば比較されると思われるのは同じくフォーレによるチェロとピアノのための《エレジー》であり様々な類似点も確認出来る。

譜例 2: 第 2 楽章の楽想

形式としては 2 部形式としての側面が強く第 1 部（1 小節目から 70 小節目まで）と第 2 部（71 小節目から最終小節目まで）にこの作品は分かれており、第 1 部と第 2 部ともに A と B にさらに 2 分割される。第 1 部の A は 1 小節目から 38 小節目まで第 1 部の B は 39 小節目から 70 小節目まで、第 2 部の A' は 71 小節目から 79 小節目まで。そして第 2 部の B' は 80 小節目から最終小節目まで。

調の動きを大きくまとめると、まずハ短調から始まり第 1 部の B は変イ長調となる。57 小節目からロ長調になりすぐに 61 小節目にはロ短調になる。71 小節目から第 2 部になるとともにハ短調にもどり、80 小節目から B' が始まるとともにハ長調になる。

3.3 第 3 楽章

この楽章の楽想ともいえるものは三種類あり、それぞれを A、B、そして C とする（譜例 3 参照）。A はは前楽節と後楽節に分けられ、a1 は上昇が特徴的な楽想だが、a2 は逆に下降が特徴的だといえる。B は A よりも抒情的であり、レガートを基調とした作りになっている。C は、A に

含まれる特徴的な動き「ラドレ」をもとにした楽想になっており、楽想のなかで最も細かく動いている。

譜例 3: 第 3 楽章の楽想

ソナタ形式的な要素がある構造となっている楽章だが、古典的なソナタ形式とは大きく異なる。主題提示部が 1 小節目から始まり 87 小節目まで続く。その後第 1 展開部が 88 小節目から始まり、141 小節目まで続く。142 小節目からは第 1 再現部となり主調であるト短調に戻る。第 1 再現部は 238 小節目まで続く非常に長いものであり、239 小節目からは第 2 展開部が始まる。第 2 展開部は 277 小節目まで続き、278 小節目からは第 2 再現部が始まる。322 小節目からコーダが始まりこの楽曲を締めくくる。

楽想の動きに着目すると主調であるト短調から楽曲ははじまり楽想 A が冒頭に現れる。そして楽想 B は変ホ長調で 64 小節目から現れ、楽想 A が次いで 119 小節目から再び現れる。160 小節目から、第 1 再現部で初めて楽想 C が用いられる。その後 221 小節目から再び B が用いられ、

251 小節目から A がまた現れる。289 小節目の 2 拍目から C が再度登場して、最後に A が 303 から用いられる。

調の動きは様々な要所ともいえる場所、例えば楽想が新しく現れる箇所や展開部から再現部へ移り変わる箇所ではト長調もしくはト短調が用いられる。内部転調的に頻繁に、フォーレらしく調性がゆらぐものの、このように調の骨子にはソの音が強く存在する。全楽章を通じていえることだが、チェロソナタである一方で、ピアノが楽想を担当することも非常に多いのが特徴ともいえ、こういった例は、同じくフォーレによって作曲された《月の光》においても確認できる。これはつまり、フォーレは伴奏に対して新しい役割を与えた作曲家ともいえるかも知れない。

参考文献

- [1] Duchesneau, Michel. "Maurice Ravel et la Société Musicale Indépendante:" *Projet mirifique de concerts scandaleux*." *Revue de musicologie* 1994: 251-281.
- [2] Gerard, Anthony. *Le langage musical de Fauré dans le quintette n. 2 OP. 115*. Éditions Billaudot, 2017.
- [3] Labussiere, Annie "Gabriel Faure 2e Sonate pour violoncelle et piano op. 117". *Analyse Musicale* 1991.
- [4] Landormy, Paul. "GABRIEL FAURÉ" *The Musical Quarterly* 17.3 (1931)
- [5] Nectoux, Jean-Michel. *Gabriel Fauré: a musical life*. Cambridge University Press, 2004.